

海外通信

白井 二一 尙

當地の講義の主なるものはハイデッカーの「ヘーゲル精神現象學」の講義ですが、之は、ニコライ・ハルトマン其の他のヘーゲル解釋を排し、ヘーゲル哲學をのこを扱ふものとする立場から、ヘーゲル哲學の、新カント派、フッサールの現象學、世界觀のモルフオロギー等と根本的に、如何に異なるかを明かにし、ヘーゲルの *absolutes Wissen* の意義を解明すると共に之とハイデッカーの有限哲學（或る意味で斯く呼ばれ得るでありませう）との關係を述べ、ヘーゲルがロゴスから *Sein* を扱ふに對し、時間から *Sein* を扱はんとするハイデッカー自分の立場から批評を加へんとするもので、雄辯なハイデッカーが「バルメニデースよりヘーゲル迄の西洋哲學本來の問題が其の後忘れ去

られて了つた」といふやうに現代の哲學一般を扱ふあたり、ハイデッカーの自信と抱負の程も窺はれますが、フッサール等に特に異を立てる傾きもあつて、やり過ぎの感じのする時もないではありません。氏は訪ねると、怖いやうに聞いてゐましたが、存外話し易い親しみ易い人です。しかし社會學には餘り興味も無いらしく、深く考へてもないやうでした。私としては、存在論的見方とか、歴史性の問題とか分つたら、斯かる見方を用ひて自分の領域で具體的に研究をして見度いと思つてゐます。例へばハイデッカーの *man* は、近代社會の *Allgeheichkeit* を主要内容としてゐるやうに思はれますが、いろ／＼の時代の *man* の *Form* 又は *Struktur* を明かにするといふやうなことが、

問題になり得ると思ひます。

フッサールも知識の客観性の基礎づけから形而上學に入つて來ました。そして、其の基礎を「*transubstantivität*」に求めやうとしてゐます。之で果して、フッサールが以前に立つてゐたと云ふ「*fühlend*」の *atomistisch* な立場が克服されるかどうかは疑問ですが、氏自らも未だ此の點が十分解決されぬと見えて、此の問題には觸れてくれません。フッサールも齡已に傾いて、自分の思想をまとめ世に残す時間の不十分なのをあせるといふ風も見えて、デイルタイの老年の頃なども想ひ合され、痛ましい氣も致します。同じ現象學の人々の中にも、眞に氏の説を理解してゐるものは、極く稀れで、誤解しつゝ批評したり、又別の道を歩むものもあるといふ風なのを淋しく思ふ様子も見えます。しかし、他方、自分の學に對する自信頗る強く、二百年の後には凡ての科學が現象學によつて

全く改造され、新しい發展を辿るであらうといふやうな事も云ひます。又自分の質實に歩いた道を私達に語つて、功を急ぐ勿れ、着實に歩めと誠めを垂れる時は、老大家の言葉として、シミ／＼と聞かれます。

當地の講師に *Kaufmann* と云ふ人が居て社會的存在の現象學なる講義をしてゐますが、之は、之迄の人の説を集めたやうなもので、一步突き込んで大切な點を明かにするといふ風が足りず、特に云ふ程のこともありません。最近獨逸に二三の社會學の本が出ました。ライプナツヒの社會學教授フライヤーの *Soziologie als Wirklichkeitswissenschaft* ミュンヘンのフェノメノローグ *Diltheydebrunde* の *Metaphysik der Gemeinschaft* 等がその主なものです。先日米田先生から、またフライヤーの本が京都へは來ないとお便りがありました。が追ひ／＼日本にも現はれると思ひます。フライ

ヤーはリットの友達で現象學について云々してゐる邊は、やはりフツサールの構成的現象學には關係ないものを云々してゐるのですが、對象としての超越的存在とも異り、體驗又は意識とも異り、第三の *geschichtliche Wirklichkeit* なるものを認め

社會意識や社會構成體の現實的存在を其處に求めやうとすること、従前の社會關係、相互作用より轉じて、*Deilertai* が *ausser Organisation* と呼んだ社會團體の如きものを社會學の對象とすること、更らに進んで、對象の意味構成の中に *schichtliches Werden* のモメントを入れ、之を重視すること等に於て、社會學に内在する發達の必然的方向に従ひつゝあるものゝ様に考へられま

の弟子カントロピッツがゐましたが、之も法律の人です。社會學の本も縁にありません。ウイーベの名を知つてゐる人も殆んど無い有様です。割合に狭い範圍で、其の代り深く鋭く究めるといふやうな風があると思ひます。私も、社會學から大部はなれて了ひましたが、一度獨逸をはなれて社會學者を訪ねて歩き度いと思つてはゐます。獨逸にゐたらいくらでも獨逸内の旅行位は出來ると思つてゐましたが、來て見ると、なか／＼さうは行きません。それでも、誰も行く、スイスを一週間許り一人で旅行をしたり、英佛を旅行された岩井先生の訪問を受けて共にバーデンバーデンへ行つたり、秋のエルザスの山を、東北帝大の三宅助教と二三日歩いたことがありました。スイスの旅は、只珍しい自然を見、各國各種の人々に接して珍しい經驗を積んだのみでしたが、車中で偶然話を交へた老紳士が、社會學の大きな著書もあ

る W. Sauer 氏であつたといふやうなこともあり
ました。春には伊太利へ行つて見度いと思つて居
ます。藝術品を見て歩くといふやうなことは直接
社會學の役にも立ちませんが、廣く文化の諸の優
れた表現に接することは、いつかは意義を發揮す
ることもあらうと思つて出掛ける次第です。在留
國の追加願に對する許可が先頃、文部省から來ま
したから、今秋は多分佛國に移るやうになるだら
うと思ひます。巴里へ行つたら、哲學よりも社會
學を専ら勉強しやうと思つて居ます。

フライブルクの日本人會の記録なるものがあつ
て、それを見ると、出邊先生の頃からのことがあ
つて、今日日本で働き盛りのやうな人々が大抵載
つて居ます。フライブルクは、人口十萬許りの小
さな町で、工場も少く、古い城下町として出來た
ところですが、シュワルツルト地方の中心都會とし
て、人情も淳朴で平和な町です。それだけに、獨

逸の一般政治状態、社會事情といふやうなもの
を知るには不便で、毎日のやうに示威運動があり、
衝突も屢起る伯林のやうなところの様子は、一寸
想像もし難いやうな有様です。當地では學生も教
授も、社會主義などに對しても、あまり *Begeistert*
sein を示しません。日本にとつては新しいこと、
大きい未來を約束するやうに見えることも、かな
り獨逸では試みた後なためもありませう。ゾチア
ールデモクラトが十二年も政權を持ち、婦人參政
權も實現してゐても、社會的窮迫は一向に改善さ
れた様にも思はれない。そこで此の政黨の人氣も
落ちて、同時に、禍患の根源は、賠償金をとる外國
の壓迫にあると云ふやうに考へて、ナチヨナルゾ
チアリストの勢力が増して來たやうですが、之は
内容は、ゾチアリストたる點よりナチオナルな
ところに存するので、最も右翼と云はれてゐます。
しかし、彼等の迅呼してゐるところは、かなり無

責任な放言の感もありますが、此の方面の事について私は、立入つて云々する資格もありません。

學生の就職難も甚しく特に女子が數學、生物學、歴史、哲學等あらゆる方面で男子同様學生になるので、學生も今は職の望み少く、口さへあれば獨逸語の教師位になつて、遠く海外へでも行き度がつて居るものが多くあります。他方には、論文も濟みながらドクトルになつても仕方ないと云つて、論文を提出せず學生の生活をつゞけてゐる人もあります。屋根裏の部屋に住み、本も餘り買はず質素に暮して居る學生が多いやうです。

大戰以後、一般に大變貧乏になつたのに、それでもなほ、當地の人々の生活態度には、何處か暢びやかなところおちついたところがあります。そして無邪氣で直率です。私達異國人をも、少しも隔てや差別を設けずに、舊知の仲間の如く扱つてくれます。一寸訪ねて行つても、居合せる知人親

戚をみな紹介して、其の仲間に入れてくれる。田舎へ出ると、行き逢ふものが大抵「今日は」と挨拶して行きます。夜の講演會のあとなど話しながら宿まで送つてくれる學生もあるといふ風です。

従つてフレームデとしての不快など殆んど感ずることなく、むしろ、土地の人の明るい親切によつて、心の暗くなり相なが明るくされることもある位です。プロシア人になると、かなり理窟に偏し、人と親しまぬところもあるやうですが、南獨人にはたしかに *deutsche Gemüthlichkeit* といふものがあるのを感じます。初めての外國生活で言葉の不自由にもかゝはらず極めて氣持ちよく暮せるのは、隠さず飾らず詐らずに、自分を示し他を信ずる南獨人の態度によることゝ、いつも嬉しく思つて居ます。

當地はスキ一の盛んなところで、ハイデッカー初めワイナハトや正月を山の小家で祝ふ教授も珍

しくないやうですが、私は、山の雪景色でも見るのみで満足です。今年は大變暖かで京都と同じ位です。初めて經驗することの多いだけに、時の経つのが早くて、また間もなく、カスタニエンの芽吹く時が来るだらうなど考へると、あはた々しい旅人の心がシミ／＼と感ぜられます。

(一九三一、二、六)

新刊紹介

フイヒテ全知識學の基礎其他

木村素衛 著
岩波書店 刊

理性は決して手を拱いて傍觀するものではない。たとへそれが宇宙の莊嚴であつても尙ほフアウストの嘆きの如くにすばらしい芝居を看ただけの事である。しかし理性は單に看るだけのものではない。理性は實踐的なのである。

„Die Vernunft ist praktisch.“ 此の言葉をフイヒテは幾度くり返しても、言ひ足らぬ思ひがしたであらう。まことにスピノザの鐵の如き因果の鎖からフイヒテを救助したものはカントの實踐理性の優位に外ならなかつたからである。理性はまことに實踐的である。存在の根據はフイヒテにとつては何よりもまづ實踐として捕へられてゐるのである。それであるからフイヒテは物自體とは何であるかとの問に對して、「我々が物々自體を作るべき通りに」(譯書四九七頁)と答へてゐるのである。フイヒテにとつては、單なる理論理性は自然に依存してのみあり、從て又自然と共に失はれ得べきものであつた。單に眺める理性は未だ眞の理性ではなく、眞の我ではなかつた。實踐的な我のみが我なのである。フイヒテは觀念論者であつたであらう。しかし彼の觀念論は單なる觀念が對象を創造すると云ふ如きそれではなくして、我々の實踐が初